

■社会教育委員 日々の活動紹介■

「自然の魅力を多彩に紹介、 NPO法人武蔵野自然塾」

白田 紀子

NPO法人武蔵野自然塾は、生き物大好き、緑大好き、そして、人にその魅力を伝えることが大好きな人たちの集まりです。どうしたら、そのすばらしさを伝えることができるのか、生き物、植物などの自然観察、自然素材を利用したクラフト、小学校へ出向いての自然観察授業、小さな頃から自然に親しんでもらうための幼児向けのプログラムなどなど工夫をこらした企画で、自然を楽しんでもらっています。見過ごしてしまうような小さな身近な自然も、じっくり見るとその不思議さ、面白さ、美しさに気づくでしょう。自然は、たくさんの命の集まりです。自然を知るとは、命を知ること。そして、自分を知ること。命のすごさをなかなか普段は実感できないけれど、自然のしくみを通して、少しでも感じてもらえるとうれしいなと思い、日々活動しています。まずは、目の前にあるステキな命に気づいてもらい、そして、もっと大きな命に目を向けてもらえるよう願います。活動を初めて15年になります。これからも、いろいろな出会いを大切にしながら活動できればと思っています。ホームページもありますので、ぜひ一度検索してみてください。



青梅丘陵自然観察で出会ったカモシカ



ネイチャークラフト・クリスマスワッグ

「オリパラで国際交流の輪を広げる —成蹊大学ルーマニア交流プロジェクト」

竹内 敬子

私は現在、成蹊大学で「成蹊大学 2020 東京オリンピック・パラリンピックプロジェクト」の一環である「成蹊大学ルーマニア交流プロジェクト」を担当しています。ルーマニア交流プロジェクトには106名の「学生スタッフ」の登録があり、武蔵野市と連携しながら、様々な活動を展開しています。今年度は、7月・8月に武蔵野市招聘研修生との2日間の交流を行いました。また、学生スタッフの2名が9月に武蔵野市の文化交流市民団の一員としてルーマニア・ブラショフ市を訪問し、貴重な交流の機会を得ました。こうした活動の一端については、2018年12月7日の「知ってみルーマニア 第2弾 ルーマニアの魅力発見」で学生スタッフによる発表の機会をいただきました。1月20日に武蔵野総合体育館で行われた「ホストタウン交流フェス Sports for All ルーマニア・パラ」にもブースを出展し、大盛況でした。成蹊大学では、オリンピック・パラリンピックを睨み、ルーマニア語の授業が開設されています。私は、「東京 2020 武蔵野市オリンピック・パラリンピック競技大会等に向けた武蔵野市実行委員会」の「文化・交流分科会」の会長も務めさせていただいており、ここ2-3年は、オリンピック・パラリンピック、ルーマニア中心の活動を行なっています。



ルーマニア交流事業学生スタッフ

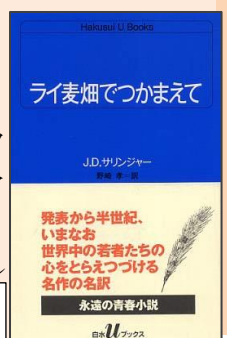
■図書館で見つけた！ 社会教育委員イチオシの本■

『ライ麦畑でつかまえて』 J.D.サリンジャー 野崎孝訳 (1984) 白水社

『キャッチャー・イン・ザ・ライ』 J.D.サリンジャー 村上春樹訳 (2006) 白水社

初めて僕がこの本を読んだのは大学入学に失敗し、浪人生になったときでした。今なお多くの悩める人たちに愛され続けるアメリカ青春文学の永遠の名著。元祖「中二病」…みたいな本です。退学処分になった16歳のホールデン少年がいろいろあって故郷に戻る話。これといったストーリーも何もないけれど「やりきれない思い」や「自分の不甲斐なさ」とか、胸の中がなんだか“ジリジリ”してどうにもこうにもだった当時の僕は、この本に一発でがっつんとやられ「これには僕も参ったね」なんてつぶやいてしまったものなのです。「建前」や「欺瞞」に満ちた大人社会に戸惑い、理想と現実の狭間でホールデンは言います。大人になりたいものは「ライ麦畑で遊ぶ子どもたちが崖から落ちそうになったときに捕まえてあげるキャッチャーのようなもの」と。翻訳は写真で示した野崎孝版と村上春樹版などがある。作者のサリンジャーは謎に満ちた作家としても有名で、2019年は生誕100年を迎えます。時代を超え世界中の悩める若者たちのバイブル。大人になってしまった僕らが読めば、あの頃の“ジリジリ”を思い出すかもしれない一冊です。(秋山 聡)

野崎孝訳版→



こもれび 武蔵野市社会教育委員だより
発行日：平成 31 年 3 月 1 日
編集：社会教育委員の会議
発行者：武蔵野市教育委員会教育部
生涯学習スポーツ課 TEL 0422-60-1902
表紙ロゴ：垂紀ロゴイラスト工房
初版：500 部



武蔵野市社会教育委員だより

平成 31 年 3 月 1 日 第 5 号

～武蔵野市が会長市を務める平成 30 年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会の活動～

交流大会・社会教育委員研修会

冬空にしばらくぶりの晴天となった 12 月 15 日（土）、武蔵野公会堂にて東京都下 29 市町から 176 名の参加をもって本交流大会および研修会が開催されました。今年度、本市は会長市として他市町をお迎えすることになり、市職員と社会教育委員とが一丸となって企画した一大イベントとなりました。

第 1 部の交流大会では、武蔵野市教育長の竹内道則氏をはじめとするご来賓の皆様からご祝辞をいただいた後、東京都下 29 市町の五つのブロックから、それぞれ研修会実施報告がありました。郷土資料館や公民館等の地域資源・文化伝承を活用した事例、障がい者や子ども等の対象者を焦点化した事例、環境問題やオリパラ問題等の現代的な諸課題をテーマとした事例が報告されました。これらの報告の共通点は、米国ハーバード大学ビジネススクールが提唱した people-centered learning（人々中心の学び）の具現化だったように思います。社会教育の場は、人々が集うあらゆる生活の場にあるというヒントをお示しいただいたように思います。そこで構築される社会的な関係性には、タテ・ヨコのみならずナナメの人間関係も社会は求めているとのフロアからのご指摘が印象的でした。

第 2 部の社会教育委員研修会では、「きょういく（教育）」、「きょうよう（教養）」で元気になる～今日行くところは、今日用事があるところは～」と題し、ヘルスプロモーション推進センター（オフィスいわむろ）代表の岩室紳也先生よりご講演いただきました。泌尿器科の医師である岩室先生の活動は、高校生への性教育から被災地におけるまちづくりまで多岐にわたります。しかし、その根幹は一緒であると言われます。

——現代に生きる私たちは、人をつなぐ手段を見失っていないだろうか。「絆」という漢字には、「きずな」と「ほだし」の二通りの読み方があり、後者の関係性（＝つらい経験）から逃げていないだろうか。——「助けて」が言える社会をつくるために、今一度自分たちの日頃の活動の意義を見つめ直す機会を与えていただきました。関係者の皆様、本交流大会・研修会の企画運営を助けていただき、誠にありがとうございました。（助友 裕子）



開会式

➤ 岩室先生の講演の内容については、はさみこんである号外をご覧ください。



第 5 ブロック研修会に参加して

本研修会は、10 月 27 日に府中市市民活動センター「プラッツ」で開催されました。最初は府中囃子保存会（新宿〈しんしゅく〉、新宿山谷〈しんしゅくさんや〉、車返〈くるまがえし〉）の 3 支部）によるお囃子による公演で始まりました。大國魂神社の祭礼をはじめ地域のお祭りに奉納されている府中囃子は、目黒流、舟橋流の保存会 24 支部、会員数約 1500 名によって継承されているそうです。おかめ、ひょっとこの面をつけ、お囃子に合わせて着物姿で踊る 20 名近くの子ども達一人ひとりの姿に伝統を守る意識の高さを感じられます。さらに、山車 1 台が 7 千万、道具 1 セットが百万と聞くと、それらの伝承を担う住民意識の高さと、その活動を支える「プラッツ」の底力が感じられます。

この後、渡邊憲司氏の講演が続きました。相手の気持ちに添う姿勢をイキ、頑固で融通の利かない態度をヤボと説明し、日本は過去に弱者をどう見てきたのか、これからどう見ていくのかを、人権という視点から問いかけます。人の内面を深く表現するマンガを日本の文化として賞賛する一方で現実はどうなのか、日本人の「おもてなし」は本当に心からの「おもてなし」になっているのか、と。歴史の中に埋もれた人に寄り添う姿と思いの痕跡を教えられ、人権について深く考えさせられた午後でした。（板垣 文彦）

管外研修

➤ 古民家「ろくすけ」

「日本の里 100 選」にも選ばれている里山の中に、都市農村交流・農泊施設「ろくすけ」はありました。建設年代は言い伝えによると天保年間といわれ、当時名主の家であったものを譲り受け、100 年ほど前にこの地に移築されたそうです。

中に入って驚いたのは、たたみ一畳ぐらいいもありそうな宮大工さんが作った神棚、そして屋号の入った欄間でした。その品々から、当時としてはモダンな名主の家だった事が想像できました。トイレと台所は宿泊者用にリフォームされていましたが、囲炉裏などは昔のまま使っており、茅葺屋根の補修用の茅は、スタッフが近くのゴルフ場で刈り取り乾燥、保存した物を使っていました。地域住民と連携し、「千葉シニア自然大学」を開講、OB による「ろくすけの会」が結成され、「ろくすけ」の整備、里山整備、畑作り、みかん農家の援農なども行っており、「ろくすけ」と地域の方々がお互い良い関係で交流しているのがよく分かりました。里山でのいろいろな事が体験交流できる施設でした。

(北村 淳子)



都市農村交流・農泊施設「ろくすけ」

➤ NPO 法人千葉自然学校

9 月 25 日（火）小雨が振ったりやんだりの天候の中、武蔵野市の友好都市である千葉県南房総市への管外研修が行われました。武蔵野市の生活福祉課へ交換職員で在籍された在原氏と大房岬自然の家の神保所長の出迎えを受け、南房総市の社会教育の取り組み・大房岬自然の家の指定管理・活動内容などの話を伺いました。

NPO 法人千葉自然学校が指定管理者で、指定管理費なしで運営しているという話に、一同驚きました。”森と海の楽校”と題した活動で、大房岬自然の家を利用して、海での自然体験活動・磯遊び・砂浜レクリエーションなど、多くの企画をし、運営をしている話を伺いました。市の社会教育課と NPO 法人が共に情熱を持って活動されているのが、伝わってきました。南房総市の社会教育の考え方、取り組みの一部ですが理解するよい研修になりました。帰りは首都高の渋滞を避け横浜経由で、港の夜景を見ながら帰路に着きました。(舟橋 優子)



指定管理者との
意見交換会



教材用
星座投影機



千葉自然学校の体育館で
指定管理者の説明を受ける

武蔵野市教育委員の
山本ふみこ氏にも
ご一緒していただき
ました！

★次期武蔵野市生涯学習計画の策定に向けた市民意識調査報告書を作成しています

平成 30 年 8 月から 9 月で市民 2,000 人を対象に実施しました「市民の学びに関するアンケート調査」等をまとめた報告書と報告書概要版を作成しています。来年度の本格的な改定作業に向けて、現行の計画（平成 21 年度策定）から 10 年間の本市における生涯学習の取り組みへの評価、さらには市民の学びに関する現状とニーズを把握するための重要な基礎資料となる報告書となります。発行は今年度末を予定しております。市内各公共施設に配架しますので、ぜひお手に取って、ご覧いただき将来の学びについて率直なご意見をお聞かせください。

★社会教育委員の会議の活動内容

毎月第 4 火曜日に定例会を行っています。生涯学習計画策定に向けた市民意識調査や本誌「こもれび」編集作業、生涯学習事業費補助金並びに子ども文化・スポーツ・体験活動団体支援事業費補助金の審査や両補助金交付団体実施事業の視察をしています。また、今年度は多摩地区 29 市町で構成される東京都市町村社会教育委員連絡協議会（通称：都市社連協）の会長市としての務めも果たしています。都市社連協の活動については本誌 1 ページ目をご覧ください。（事務局）

第60回全国社会教育研究大会青森大会 平成30年10月24日～26日、リンクステーションホール

研究主題は、「課題をチャンスに 持続可能な未来を創る社会教育の実践を」で、大会スローガンが、「社会教育の新たな種を広めよう 青い森から全国に」でした。参加者は926名で地元の青森県が450名（東北6県で666名全体の72%）、その他が260名（東京都からは19名、愛媛県と熊本県からの参加者ゼロ）。1年に1度の全国大会とはいえながら、出張費のハードルは高く日程がウィークディであることも参加者を限定させている一因になっているのでしょうか。

さて、今大会の初日は「理事会」など関係者のみの参加。二日目の午前が「全国社会教育委員連合総会」。午後から「アトラクション」「開会行事」（主催者挨拶、来賓祝辞、歓迎の言葉）、記念対談（三村申吾青森県知事と大橋謙策全社教連前会長）、シンポジウム「社会教育の実践の活用化に向けた社会教育委員の見える化」、終了後に「情報交換会」という懇親会。第3日目は5つの分科会「課題解決に挑戦する地域づくりと社会教育」「新しい公民館の探求」「地域全体でサポートする家庭教育」「地域と学校の連携・協働の在り方」「地域を元気にするアクティブシニア」で、私は第1分科会に参加して、「諸活動に対して、第三者評価をどのような形で行い、評価結果をどのように活動の改善に結びつけているのか」と質問しました。

青森大会終了後に、「青森市森林博物館」を見学しました。博物館の建物は、「青森営林局庁舎」を活用した日本初の森と木を考える博物館で1982年に開館。青森県林業の歴史が、「子どもたちからお年寄りまで学習できる展示」のために工夫満載の社会教育施設でした。（宇佐見 義尚）



社会教育委員参加者



森林博物館
(有形文化財)

★指定管理施設の比較

管外研修にて南房総市の大房岬自然の家を見学しました。こちらの施設は昭和55年に千葉県立の青少年教育施設として開所し、平成17年9月に県が指定管理者制度を導入、さらに平成20年度からは県から南房総市に事業移管され、現在、NPO法人千葉自然学校が運営を委託されています。この施設の最大の特徴は市からの指定管理料なしで運営を行っている点です。今の子どもたちが抱える複雑な課題について、南房総市の豊かな自然を活かしたイベントの企画や宿泊体験、野外活動を推進することで解決の糸口を見出し、市外はもちろん県外からも利用者を集めています。



長野市少年科学
センター

また11月16日には関東甲信越静社会教育研究大会長野大会終了後に長野市少年科学センターを見学しました。こちらは開館30年以上が経過した施設ですが、平成18年度より長野市直営から指定管理者制度に移行、民間企業が維持管理と企画運営を行っています。制度導入後はサイエンスショーや各種工作教室等の自主事業を企画・開催し、就学前の園児とその保護者の集客に成功、全体の来館者数も導入前より大幅に増加しているとのことでした。両施設とも武蔵野市とは違う形での指定管理制度を利用しており、生涯学習施設を含めた今後の施設のあり方を考えるよい契機となりました。（荒井 恵風）

第49回関東甲信越静社会教育研究大会長野大会

平成30年11月15日（木）～16日（金）に、ホクト文化会館で開催されました。本大会はちょうど10年前にも長野県と同じ会場（当時は長野県民文化会館の名称）で開催されています。今大会の参加者は952名（地元長野県から476名全体の50%、東京からは81名）。大会スローガンは「信州で 出会い・ふれあい・学びあい～皆で語ろう 地域づくりは人づくり～」で、研究主題は「連携・協働による未来志向の社会教育のあり方を考える～持続可能な地域コミュニティを目指して～」。



社会教育委員参加者

第1日目は「全体会」で、アトラクションの真田勝鬨太鼓のあと、主催者挨拶、来賓祝辞、基調講演「人と地域が育つ社会教育の役割」（佐藤一子氏）、パネルディスカッション「連携・協働による未来志向の社会教育のあり方を考える～持続可能な地域コミュニティを目指して～」。第2日目は「分科会」で、「学校・家庭・地域の連携と社会教育」「公民館活動と社会教育」「福祉教育と社会教育」「社会教育委員の役割と社会教育」「未来の地域づくりと社会教育」の5分科会に分かれて、各2事例の実践報告者を中心に熱心な討議が行われました。ちなみに私は第3分科会に参加して、「社会教育と社会福祉の融合によって、現在それぞれが手一杯の仕事量がさらに過重労働になりはしないか」との質問を行いました。（宇佐見 義尚）